

産禅洞だより

〒岐阜県岐阜市研究所・産禅洞診療所
 ◎ 呼吸器疾患・消化器病・漢方相談
 診 察 日：月曜・木曜・金曜
 受付時間：9:00～12:00
 〒502-0017 岐阜市長良御殿878-14
 IP Tel:058-295-9545
 FAX:058-296-2903
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp
 http://zazendoh.tourweb.net/
 169号 2018.4.1.
 毎月1回発行 産禅洞診療所 松井英介



161頁の「産禅洞ニュース」出生前診断を受ける前に考えてほしいことと題したシンポジウム(19年10月東京女子医大)で発言するおべけん太さん

いのちと尊厳を大切に

松井 英介

私たちのまわりには、さまざまな差別があります。

ハンセン病の方々に対する去勢手術はその一例です。離れ小島や不便な山の中に隔離施設をつくって、家族や一般社会との交流を断ちました。第二次大戦後特効薬プロミンが開発され、感染の恐れがないことがわかってからも、国による隔離政策はそのまま変更されず、中学生など子どもに対する去勢手術がつけられました。断りに何の説明もないまま、手術が強行された場合もあります。岐阜県も例外ではありませんでした。被害者は、国を相手取って、裁判に立ち上がっています。

妊婦の血液で胎児の染色体異常をしらべる新出生前診断(NIPT)。これも重大な問題を孕んでいます。日本産科婦人科学会は、3月にこれを一般診療とすることを決めました。

ダウン症の娘を育てた経験のある山本俊至医師(東京女子医大病院小児科、臨床遺伝専門医)は、「検査を受けるのであれば、ダウン症や障害のある子が社会でどう生きているのかということを知って、理解を深めてほしい」と述べました。

「出生前診断を受ける前に考えてほしいこと」と題した公開シンポジウムが、3月24日(土)東京女子医大で開かれました。「育てる苦労は同じ」。このシンポを伝えた岐阜新聞(2018年3月27日付)が見出しに使った山本医師のコメントです。

「ダウン症だって明るく楽しく毎日過ごしています。生きていく権利があると思います」。

3月24日夕方のNHKニュースは、ダウン症を背負ったタレント・おべけん太さんの訴えを伝えました。

翌25日付毎日新聞は「NIPTでダウン症の赤ちゃんが生まれなくなるのは嫌だ!」とのけん太さんの声を載せました。

江戸から明治、とくに明治以降の歴史をたどると、さまざまな差別が人びとを苦しめてきたことがわかります。ハンセン病、水俣病、原爆被害者、障害者、アイヌ民族、沖縄県出身者、在日朝鮮・韓国人をはじめとする在日外国人・・・そして原爆大惨事の被災者。

「私は十四歳で広島を被爆視た。八十歳で福島を被爆視た。原爆と原発は、一筋に繋がるものと感じてきた」^{1)・2)}。堀場清子さんの言葉です。

私は今、彼女の大作にしっかり向き合おうと考えています。

2018年3月27日 岐阜新聞 20頁

新出生前診断 一般診療へ

まず障害への理解を



【産科】出生前診断(NIPT)が一般診療へ。妊婦の血液で胎児の染色体異常をしらべる。日本産科婦人科学会は、3月にこれを一般診療とすることを決めました。東京女子医大の小児科専門医、山本俊至医師は「検査を受けるのであれば、ダウン症や障害のある子が社会でどう生きているのかということを知って、理解を深めてほしい」と述べた。

【産科】出生前診断(NIPT)が一般診療へ。妊婦の血液で胎児の染色体異常をしらべる。日本産科婦人科学会は、3月にこれを一般診療とすることを決めました。東京女子医大の小児科専門医、山本俊至医師は「検査を受けるのであれば、ダウン症や障害のある子が社会でどう生きているのかということを知って、理解を深めてほしい」と述べた。

参考資料:

- 1) 奥村みどり、藤野色「差別の日本近現代史—包摂と排除のはざままで」(2015年) 創言書房。
- 2) 堀場清子「片鱗—ヒロシマとフクシマと」(2014年) ドメス出版